

自分に自信をもたせて中学校生活を過ごせるようにする支援

不登校生徒の状況

対象生徒は、自閉スペクトラム症の診断があり、他者とのコミュニケーションに困り感がある。教室で学習を続けることに困難さを感じて、不登校となっている。

具体的な取組

○校内別室の充実

校内別室では、支援員が当該生徒の特性を受け止め、当該生徒の希望（電車のことが特に好きで、同性の支援員に聞いてもらいたい）を聞き、学習への意欲に変換できるように働きかけてきた。

支援員のサポートで、定期考査を別室で受けるなど、徐々にできることが増えてきてきた。



○担任の支援

当該生徒が、給食や休み時間を教室で過ごせるように、担任は教室に入りやすい雰囲気づくりを心がけている。また、放課後等の時間に、担任と当該生徒で個別の面談を行うなど、当該生徒が学校や在籍学級とのつながりがもてるようにしている。

○相談部会での情報共有

教職員間で、情報を適切に共有できるように、週1回相談部会を行っている。

校内での当該生徒の活動が広がるように、外部機関との連携を視野に入れながら、全教職員で情報共有を図っている。

○SCとの連携

当該生徒は、支援員の来ない日は、SCと面談するために登校している。SCは、当該生徒の考えや願いを受け止めるとともに、保護者と情報共有を行い、必要に応じて保護者の心理的なケアも行うなどの支援もしている。

成果

当該生徒は、教室だけでなく廊下や学年スペースでも活動できる日があった。周囲の生徒も、いつでも分け隔てなく関わっているため、当該生徒の安心と意欲の向上になっている。現在は、志望する高校への進学を目標としている。

課題

学校生活においてできることの範囲が広がっているため、今後は、当該生徒の自己肯定感を更に高めていくことが課題である。

個々のニーズに応じた校内別室の運営

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校 1 年生の 1 学期に友人関係の問題をきっかけとして欠席が増え、その後不登校状態となった。2 年生から、校内別室として新設した校内別室の利用を開始し、開室日に合わせて登校できるようになった。別室登校を続けるうちに授業参加への意欲が高まり、段階を踏んで教室復帰を目指している。

具体的な取組

○個々のニーズに応じた環境整備

校内別室では学習支援だけでなく、小集団との交流によるコミュニケーションの練習も行っている。個々のニーズや活動内容に応じて利用できるよう、パーティションを活用して学習スペースと交流スペースを分けて対応している。交流スペースにはぬいぐるみや利用生徒が描いた絵を飾るなど、生徒が安心して過ごせるよう温かみのある空間づくりを工夫している。



○教室復帰へのステップ

学習の遅れを取り戻すための個別の学習支援やオンラインでの授業視聴など、教室復帰への不安軽減を図っている。この取組により、教室復帰や授業参加への意欲が高まっている。

○校内委員会による情報共有

週 1 回校内委員会を開催し、当該生徒の別室での状況を確認するとともに、教室復帰に向けた段階的な支援内容を検討している。

○S C との連携

S C の来校日には校内別室で当該生徒と交流をする時間を設定している。その関わりから個別カウンセリングにつなげ、当該生徒の状態に応じた課題の把握や支援内容の検討に役立てている。

成果

当該生徒は校内別室の開室日に合わせ、継続的に安定して登校できるようになった。また、教室復帰への意欲が高まり、段階を踏んで参加できる授業を増やしている。

課題

校内別室の利用生徒には、家庭の問題がある生徒や、特別な教育ニーズが必要なとなる生徒が含まれる。多様な課題とニーズに応じた個別支援を行うために、校内のチーム力を強化していくことが今後の課題である。

校内別室の支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、同級生とのコミュニケーションの機会が減少し、心理的不安や、孤立感、寂しさを感じることもある。学習への遅れが顕著になるなど、学習に対しての不安もある。

具体的な取組

○校内別室の運営

校内別室は、教室に入りづらい生徒が個に応じた学習支援を受けるための教室である。利用する生徒たちのために、個別の指導計画に基づいて学習支援が行い、リラックスの場としても位置付けている。

○利用の流れやルールを明確化

生徒が利用する場合、生徒の体験や保護者の同意、利用書を提出することとしている。登校時刻を生徒が事前に申告する、教材は持参する、オンライン学習の際にはイヤホンを利用する等のルールを明確にしている。

○目的を明確にした校内別室

学習の場として位置付けている校内別室では、学力向上専門員が主に学習支援をしている。毎日開室し、16人の生徒が利用している。



○目的を明確にした校内別室

リラックスして活動する場として位置付けている校内別室では、支援員が見守り支援をしている。週3日開室し、の生徒が利用している。



成果

校内別室の利用人数が増加し、不登校生徒のニーズに合った居場所の運営ができています。90日以上欠席した生徒が減少するなどの成果が見られています。

課題

校内別室の利用生徒が増えることにより、個に応じた支援の実施が難しくなる。個に応じた支援の実現を図ることが課題である。